

私は本学学部 4 年より有機化学の研究室で含フッ素化合物合成の研究を行っています。修士、博士と同じ研究室に進み、現在博士 1 年目を終えようとしています。今回は湯浅年子記念特別研究員奨学基金と 2023 年度フランス政府奨学金との共同給費という形で、2023 年 9 月から 2024 年 2 月までの半年間フランス北部のノルマンディー地方にある Université de Rouen Normandie にて、研究活動を行うことができました。この留学に関しては、渡航にたどり着くまでも何段階もステップがあり険しい道のりだった、と感じているので、滞在中のみでなく留学決定から振り返っていこうと思います。

・留学を目指した時期と応募、決定まで

海外での研究に興味があり、在学中に研究留学したいと思っていたことが博士課程に進学した理由の一つでした。他の基金に応募することもできましたが、通常博士課程の学生が留学できる期間は 3 カ月程度のように、私はできるならもう少し長くしたいな・・・というのが正直なところでした。その時見つけたのが本基金で、留学先はフランスで探すことが必要である一方、半年間十分な資金を頂きながら留学ができる、というとても魅力的なものでした。

この奨学金に応募するための最初の難関は留学先を決めることでした。渡航の 1 年以上前に、「奨学金が取れたら行きたい (けど取れなかったら多分行けない)」という条件付きで推薦書を書いてもらう先生を探すのが大変だったことを記憶しています。向こうでどんな研究をしたいか、半年間で何ができるのか、今後はどう生かせるか、研究留学は初めての経験だったため、何を重視したら良いかよくわからず、本当に行けるのかどうかもわからず、それなら受け入れてくれる先生がいるのなら場所はどこでもいいな・・・という考えでした。2022 年の 5 月くらいから留学先を探し始めたところ、指導教員の矢島知子教授のアドバイスもあり、その時期日本に 3 カ月滞在していた Université de Rouen Normandie の Dominique Cahard 博士に話を聞くのがよさそうだとということになりました。Cahard 博士は有機フッ素化学で世界的に有名な先生なので、研究計画もしやすそうだったのです。

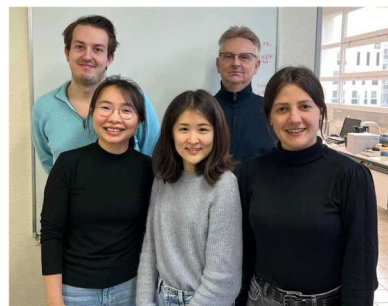
話はスムーズに進み、都内の他の大学と本学で 2 度のディスカッションの機会を与えていただきました。その時に、奨学金の内容の詳細や希望する留学時期、自分の研究内容とやってみたいコラボレーション内容など、かなり詳細に決めることができたので安心して応募に踏み切ることができました。研究所はノルマンディー地方の Rouen という町でした。地図を見たところパリも近そうなのでなんだかよさそう、と留学への期待を膨らませる日々が続きました。

実際に留学が決まったのは 2023 年の 1 月末でした。湯浅年子記念奨学金の採用候補となったのはそれよりずっと前だったのですが、その後フランス大使館への申請書の提出や面接があり、安心できるまでは何ステップもある、という感じでした。決定したことを Cahard 博士に伝え、大変喜んでいただき嬉しかったことを覚えています。そのあとは次々とやってくる事務手続きに追われました。特に大変だったのは向こうの研究所に受け入れてもらうために必要な書類たちの準備です。アポスティーユと公証翻訳付きの出生証明書や修了証明書を集めるのに時間がかかり、それ以外にもビザ申請や飛行機のことを行っていたらあっという間に渡航の日が近づいてきました。

・ Rouen 到着後の生活について

出発便は成田空港からワルシャワで乗り継いでパリの CDG 空港行きで、そこから数時間待った後にバスで 2 時間かけて目的地の Rouen に向かいました。バスやアパートの全ての手続きは Cahard 博士に行っていたため、特にトラブルはなく到着することができました。が、こちらでも待っていたのは事務手続きです。ビザの認証、保険、銀行口座の開設、家賃補助申請、全て初めてだったので想像以上の時間がとられてしまいました。また、比較小さな町を選んだこともあり、初めはフランス語に苦労しました。アパートや大学の食堂の方のみならず、バスの運転手さん、お店の店員さん、フランス語しか話さない人が結構います。私は留学のモチベーションを上げるために渡航前に半年ほどフランス語レッスンに通っていましたが、現地のフランス語は速すぎて何を言っているかわからず、あれ、全然身についてない、と少々凹みました。

研究所の生活については、終始「日本と違いすぎる！」という印象でした。ワークよりライフを重視する風潮、噂では知っていたけど実際目の当たりにすると目から鱗でした。長い時間働くのはアジアからのポスドクばかりでした。それでも、人々はさぼっているわけではなく、やるときはやる、メリハリを大事にする文化なのかな、とも思いました。私は、予定していた研究内容が少し変更になったり、実験室が途中で変わったり、順風満帆といえるスタートではありませんでしたが、何とか毎日実験を行うことはできました。お世話になった研究所の仲間たちの写真を右に示します。Cahard 博士と、フランス、ベトナム、ウクライナからの博士課程の学生です。この他にも大勢の博士課程学生とポスドクの友達ができました。



また、週末は Rouen の探索や旅行を楽しみました。幸い私の奨学金はユーロでの支給だったので、1 ユーロ 160 円という大円安の影響もあまり受けることがなく、フランス国内外に旅行することができました。特にこだわりがなく選んだ町 Rouen ですが、大聖堂や西洋の街並みが美しく、見ていて心が浄化されました。右の写真が一番有名なノートルダム大聖堂です。また、パリ市内へは電車 1 時間半でアクセスでき、CDG 空港へは直通バスが通っています。それでいて都会過ぎないので、治安がそこまで悪くなく、全てにおいて半年間の留学にぴったりな場所だった、と思い満足しています。



・ 留学を終えて

まずは、無事に留学を終えて帰国することができてほっとしています。また、日本から持ち込んだテーマを一つまとめることができ、フランスでもわずかですが新しい反応を見つけることができたので、研究者としても少しは成長できたかなと思います。また、海外で研究をすることのノウハウが大体わかったので、今度はもっと長く研究留学を行いたくなりました。ヨーロッパの国々もまだ全然回れていないので、博士取得後はヨーロッパか北米でのポスドクを目指そうかなと考えています。そう思えるくらい、今回の留学は充実した、有意義な時間でした。最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった湯浅年子記念特別研究員奨学基金とフランス政府奨学金、日仏理工科会様、矢島教授と Cahard 博士をはじめとする関係者の方々、フランスで親しくしていただいた全ての方々に感謝いたします。